

衣生活領域における小・中・高一貫教育の必要性とそのあり方
一児童・生徒・大学生の衣生活への意識と実践に関する調査を通して—
富山大学教育 ○岡村美乃里 諸岡晴美 中川眸

(目的) 衣生活領域に関して小・中・高の学習指導要領をみると、立場・視点が異なるとはいえ扱われる内容の類似性が高い。このことが児童・生徒の興味・関心を減退させる一因となっていると思われる。また中学校技術・家庭科において「被服」領域が選択となっている現状では、少ない時間でより効果的な衣生活教育を行わなければならない。このためには小・中・高一貫した衣生活教育の内容を検討する必要がある。本研究では①児童・生徒・大学生の衣生活に対する意識が、学年進行とともにどのように変化するか、②これまでの学習がどの程度実践されているかについて調査・分析し、小・中・高における衣生活教育のあり方を考察する。

(方法) 富山県内の小学6年生、中学・高校の1~3年生および大学生の計1659名を対象として、衣服の購入、ファッションへの関心、管理と補修の実践ならびに衣生活領域の学習に対する意識を調査した。

(結果) 自分で衣服を購入する割合は中学2年で大きく増大し(40.5%)、これに伴ってファッションへの関心も増大している。購入時にサイズ表示を見ると回答している割合は高いが、同時にサイズ間違いをしている者も多い。中・高女子の洗濯実践率は高いが、その半数以上が取り扱い絵表示を見ていない。衣服の補修に関してはボタン付けをするという割合は比較的高いが、ほころび直しについては実践率が低く、女子でも高校2年まで家族に頼っている傾向がみられた。これらの調査結果を分析して、発達段階に応じたの衣生活教育のあり方を考察した。